武蔵野日曜集会

わが時機
――ヨハネ伝第7章1～36節――

１９８４年６月24日（武蔵野）
小池辰雄

カイロス　無者が本もの　ざるを得ず　私は本ものから来た本もの　次元の相違　決定的な時
は聖霊のバプテスマ　わが時は汝の時　十字架にかかる時

【ヨハネ7・1～36】

1この後イエス、ガリラヤのうちを巡り い給う、ユダヤ人の殺さんとするに因りてユダヤのうちを巡ることを欲し給わぬなり。2ユダヤ人の仮庵の祭ちかづきたれば、3兄弟たちイエスに言う『なんじの行う業を弟子たちにも見せんために、此処を去りてユダヤに往け。4誰にても自ら顕れんことを求めて隠に業をなす者なし。汝これらの事を為すからには己を世にあらわせ』5是その兄弟たちもイエスを信ぜぬ故なり。6ここにイエス言い給う『わが時はいまだ到らず、汝らの時は常に備れり。7世は汝らを憎むこと能わねど我を憎む、我は世の所作の悪しきを証すればなり。8なんじら祭に上れ、わが時いまだ満たねば、我は今この祭にのぼらず』9かく言いてなおガリラヤに留り給う。

10而して兄弟たちの、祭にのぼりたる後、あらわならで潜びやかに上り給う。11祭にあたりユダヤ人等イエスを尋ねて『かれは何処に居るか』と言う。12また群衆のうちに囁く者おおくありて、或は『イエスは善き人なり』といい、或は『いな群衆を惑わすなり』と言う。13然れどユダヤ人を懼るるに因りて誰もイエスのことを公然に言わず。

14祭も、はや半となりし頃イエス宮にのぼりて教え給えば、15ユダヤ人あやしみて言う『この人は学びし事なきに、如何にして書を知るか』16イエス答えて言い給う『わが教はわが教にあらず、我を遣し給いし者の教なり。17人もし御意を行わんと欲せば、此の教の神よりか、我が己より語るかを知らん。18己より語るものは己の栄光をもとむ、己を遣しし者の栄光を求むる者は真なり、その中に不義なし。19モーセは汝らに律法を与えしにあらずや、然れど汝等のうちに律法を守る者なし。汝ら何ゆえ我を殺さんとするか』20群衆こたう『なんじは悪鬼に憑かれたり、誰が汝を殺さんとするぞ』21イエス答えて言い給う『われ一つの業をなしたれば汝等みな怪しめり。22モー

セは汝らに割礼を命じたり（これはモーセより起こりしとにあらず、先祖より起こりしなり）この故に汝ら安息日にも人に割礼を施す。23 モーセの律法の廃らぬために安息日に人の割礼を受くる事あらば、何ぞ安息日に人の全身を健かにせしとして我を怒るか。24 外貌によりて審くな、正しき審判にて審け』

25 爰にエルサレムの或る人々いう『これは人々の殺さんとする者ならずや。26 視よ、公然に語るに之に対して何をも言う者なし、司たちは此の人のキリストたるを真に認めしならんか。27 然れど我らは此の人の何処よりかを知る、キリストの来る時には、その何処よりかを知る者なし』28 爰にイエス宮にて教えつつ呼わりて言い給う『なんじら我を知り、亦わが何処よりかを知る。されど我は己より来るにあらず、真の者ありて我を遣し給えり。汝らは彼を知らず、29 我は彼を知る。我は彼より出で、彼は我を遣し給いしに因りてなり』

30 爰に人々イエスを捕えんと謀りたれど、彼の時いまだ到らぬ故に手出する者なかりき。31 斯て群衆のうち多くの人々イエスを信じて『キリスト来るとも、此の人の行いしより多く徴を行わんや』と言う。32 イエスにつきて群衆のかく囁くことパリサイ人の耳に入りたれば、祭司長・パリサイ人ら彼を捕えんとて下役どもを遣ししに、33 イエス言い給う『我なお暫く汝らと偕に居り、而してのち我を遣し給いし者の御許に往く。34 汝ら我を尋ねん、されど逢わざるべし、汝等わが居る処に往くこと能わず』35 爰にユダヤ人ら互に言う『この人われらの逢い得ぬいずこに往かんとするか、ギリシヤ人のうちに散りおる者に往きてギリシヤ人を教えんとするか。36 その言に「なんじら我を尋ねん、然れど逢わざるべし、汝ら我がおる処に往くこと能わず」と云えるは何ぞや』

●カイロス

1 この後イエス、ガリラヤのうちを巡りい給う、

五千人のパンの奇蹟のあとで、また生命の問答があったですね、

「我を食らえ、我を飲め」

と。

ユダヤ人の殺さんとするに因りてユダヤのうちを巡ることを欲し給わぬなり。

南の方のユダヤへいらっしゃる気持はしばらく控えている。

2 ユダヤ人の仮庵の祭ちかづきたれば、

「仮庵の祭」というのは三大祭のひとつで、「過越」と「七週の祭」と三つあるわけです。七週というのは五十日だから、例の五旬節のことです。これは荒野を40年間、幕屋を張っては畳んで神さまと一緒に歩いていた。それを記念する祭なんです。「仮庵」とは、「仮の天幕

を張って」ということで、刈り入れ時のときにやる。大体、10月です。

それまでの約半年の間、キリストはガリラヤ伝道をされた。キリストのガリラヤ伝道は特にマタイ伝14章から18章のところです。非常にいろいろな奇蹟が行われた。

3兄弟たちイエスに言う『なんじの行う業を弟子たちにも見せんために、此処を去りてユダヤに往け。

「兄弟たち」というのは、キリストの兄弟、家の血肉の人たちが一番、キリストのことがわからない。肉のキリストしかわからない。

「なにかこの頃おかしなことをやったり、言ったりしているな。けれども、それをもしみんなに示すなら、ユダヤに行って、エルサレムの本山の所に行って、やったらよかろう」

というわけです。

4誰にても自ら顕れんことを求めて隠に業をなす者なし。汝これらの事を為すからには己を世にあらわせ』5是その兄弟たちもイエスを信ぜぬ故なり。

イエスがキリスト、メシヤであることが分からないということです。

6ここにイエス言い給う『わが時はいまだ到らず、汝らの時は常に備れり。7世は汝らを憎むこと能わねど我を憎む、我は世の所作の悪しきを証すればなり。

「わが時」とは「ホ・カイロス・ホ・エモス」という字です。「カイロス」という。これはドイツ語でいうと「ツァイト・プンクト」、ある「時点」なんです。しかもそれは大事な意味を持った時点――そういう使い方ばかりではありませんけれども――大体そういうことです。大体、「カイロス」という字は、「ケイロー」という動詞から来ている。これは「切る、切断する」こと。ある時間の中で、そこで断層のあるような時、それがこの「カイロス」なんです。

ほかにギリシア語で「時」という字は「クロノス」という字があります。「クロノス」の方はむしろ、継続したある時間のことをいう。正に「時間」だね。「カイロス」の方は時刻、「時機」です。もうひとつ、「ホーラ」という字は、春夏秋冬の「季節」、それから一日の「アワー」「一時間」をいう。「ホーラ」は「クロノス」の方に似ているけれども、「カイロス」は正に切断するような「時機」です。

●無者が本もの

キリストが「我が時」と言われたのは、自分がエルサレムに行って十字架にかかる時機なんです。ちゃんともうそのことは預言しておられる。

「わが時はいまだ来らず。それまでにまだやることがあるんだ。お前たちの時は常に備わっている。いつでもいいじゃないか。そんな呑気な時なんだ、お前たちの

時は」
と。

世は汝らを憎むこと能わねど、
ということは、モーセの律法に外側から大体合うようなことをやっているから、別に憎まれない。けれども、自分はモーセの律法を外側はむしろ破っているから――本当の律法の精神をお前たちは分かってないけれども――というわけなんです。

我を憎む、我は世の所作(しわざ)の悪しきを証すればなり。
とにかく、みんな間違っていると、そういうことを端的に言うものだから憎まれると。

8 **なんじら祭に上(のぼ)れ、**
お前たちは仮庵の祭に行ったらよかろうと。

わが時いまだ満たねば、我は今この祭にのぼらず』 9 **かく言いてなおガリラヤに留り給う。**
おしのびで行かれたわけです。水戸黄門みたいだな。

10 **而して兄弟たちの、祭にのぼりたる後、あらわならで潜(しの)びやかに上り給う。**
祭だから来ていると思って、どこにいるんだと言って、キリストを狙っているわけです。

11 **祭にあたりユダヤ人等イエスを尋ねて『かれは何処に居るか』と言う。**
12 **また群衆のうちに囁(ささや)く者おおくありて、或は『イエスは善き人なり』といい、或は『いな群衆を惑わすなり』と言う。** 13 **然れどユダヤ人を懼(おそ)るるに因りて誰もイエスのことを公然(おおやけ)に言わず。**
全くその時の情況をそのまま書いてあるわけです。

14 **祭も、はや半(なかば)となりし頃**
これは一週間ほどやりますから。

イエス宮にのぼりて教え給えば、
今度は、イエスはおしのびかと思ったら、はっきりと神殿で語り始めた。

15 **ユダヤ人あやしみて言う『この人は学びし事なきに、如何にして書(ふみ)を知るか』**
「学んだことはないはずなのに、どうして旧約聖書をよく知っているか」
と。ところが、「書を知るか」と言っても、それは彼らの知り方とは違うんですけれども。

16 **イエス答えて言い給う『わが教(おしえ)はわが教にあらず、**
これがもうはっきりしたキリストの言葉です。

「自分は無教者だ。教えなんかないんだ」
と。だから、私は「無者」と言っているのは、この言葉からも来ているわけです。いわゆる自分の意見や勉強や何かでもってものを言っているのではないと。

「私は神さまから言われていることを言っているだけだ。自分には教えなんてものはないんだ」

と。旧約聖書を読んでも、聖書にとらわれてないですよ。彼は旧約聖書の奥を読んでしまうんだ。それは神さまの啓示で読んでしまう。

「論語読みの論語知らず」

という言葉があるが、本当の論語の読み方とか、聖書の読み方というのは上からの光で読まなかったら、はっきり言えば聖霊の光で聖書を読まなかったら、聖書は読めない。私はもうはっきり体験して知ってますから。いくら聖書の研究会が研究して、ギリシア語やヘブライ語ができたって、それは本当は読めてないんですよ。文字面は読めたって、奥が読めない。

これは非常に権威ある言葉です。

わが教はわが教にあらず、我を遣し給いし者の教なり。

と。

「自分は遣わされた者、アンゲロス、使者である。お使いだ」

と。それはいつもキリストは父の中に祈り入っているから。祈りの人でなければ、このことは分からんですよ。遣わされて、その言葉は、教えというのはどこから来ているかと。祈りで受けとるわけです、祈りの世界で。だから、祈り入らなければ。

17 **人もし御意を行わんと欲せば、此の教の神よりか、我が己より語るかを知らん。**

「私が神さまからものを言っているか、自分で勝手にものを言っているか、御意を行おうと思えばそのことが分かる」

と。御意を行おうとするためには、御意を聴かなくてはならないでしょ。聴くためには祈らなければダメです。神さまの言は、神言は意味ではない――もちろん意味もありますけれども――力を持っている。神言は力を持っているから、それが行える。神言を体現、実現できる。二段構えではない。力のある言だから。そこが完全にズレているんです、一般のキリスト教は。みんな意味の世界に変わってしまっている。ただ意味の世界で、どうだこうだと言って、それで辻褄を合わせていい気になっている。そんな辻褄の合うようなものではないですよ。

18 **己より語るものは己の栄光をもとむ、己を遣しし者の栄光を求むる者は真（まこと）なり、その中に不義なし。**

18節は大事な言葉ですね。「真（まこと）なり」とは

「その人はアレーテースである」

と。「真」は名詞では「アレテイヤ」です。「真理」という訳がどうも観念的になって困るんだ。

「自分を遣わした者の栄光を求める者は本ものだ」

ということです。

「うそ者じゃないぞ、本ものだ」
と。私は「本もの」という言葉が好きだ。
「我々の賜っている福音は本ものでござるぞ、作ったのではないぞ」
と。この花は本ものなんだ。これは造花ではない。どんなに虫がくっていても、これは本ものだ。生命がある、光がある。
「不義なし」とは――「義」というのは神さまとのつながりがしっかり立っているのが義ですから――これは本ものなんだ。神さまを全的に「はい」と言って、こっちは問題にしない。これが本ものなんだ。だから、無が、無者が本ものだ。私が無いから、無我であるから。無我の境地の魂は本ものであると。こういうことです。これがなかなか分からないんだよな。

●ざるを得ず

19 **モーセは汝らに律法を与えしにあらずや、然れど汝等のうちに律法を守る者なし。汝ら何ゆえ我を殺さんとするか』**

「本当の意味で律法を守っている者はないじゃないか」
と。外側からは守っているかもしれないけれども、本当は律法を守っていない。律法を本当に内側から実行していない、実存してないということです。
「自分は勉強せざるを得ない」
と、「ざるを得ない」世界で動いている人が本ものなんです。
「勉強すれば成績が良くなるから、先生に誉められるから。しないと叱られるから」
なんていう条件でもってやっているのはみんなうそものです。
だから、「ざるを得ず」という必然で動いている。この「ざるを得ず」という必然が本当の自由なんです。これが分かっていない。
西郷南州は天を相手とした。天を相手とした彼は、
「かく言わざるを得ず、動かざるを得ず」
というように動いていた。西郷南州は本ものの魂です。天を相手にした。私は自分の号にみんな「天」をつけるのは、やはりそういう気持があるからです。天は非常に宗教的な共通な言葉です。「天にいます」という。天と言ったって、人間的には少し上の方の空間を考えるかもしれないけれども、これは霊界の絶対界のことが天なんだ。

20 **群衆こたう『なんじは悪鬼に憑かれたり、誰が汝を殺さんとするぞ』**

「そんなこと言って、悪鬼に憑かれたようなことを言っているな」
と。いや、彼らは知っているんですよ、本当は。ローマの官憲やユダヤの祭司や教法師やパリサイ人やサドカイ人、そういった上層階級の人たちはキリストを狙っている。民衆は別にそういう気持でないから、
「なぜ、そんなことを言っているのか」

と、一応言っているんだけれども、やがて彼らはその支配階級の煽動にのっかってしまって、

「キリストを十字架につけろ」

と大騒ぎして、バラバを救うようなことをしてしまった。

21イエス答えて言い給う『われ一つの業をなしたれば汝等みな怪しめり。22モーセは汝らに割礼を命じたり（これはモーセより起こりしとにあらず、先祖より起こりしなり）

割礼もレビ記12章にありますけれども、もちろんアブラハムから来ているんです。創世記17章です。モーセがつくったのではないけれども、一応、モーセの律法の中に入っている。レビ記は祭司法です。

この故に汝ら安息日にも人に割礼を施す。23モーセの律法の廃らぬために安息日に人の割礼を受くる事あらば、

とにかくそれで一応守って、安息日に割礼を受けることがあるならば、

何ぞ安息日に人の全身を健かにせしとして我を怒るか。

「一つの業」というのは、ヨハネ伝5章のベテスダの池で人を救ったでしょ、あの時が安息日なんです。ここで言っているのはそのことだ。

「2……ベテスダという池あり、…… 5ここに三十八年、病になやむ人ありしが、…… 8イエス言い給う『起きよ、床を取りあげて歩め』 9この人ただちに癒え、床を取りあげて歩めり。その日は安息日に当りたれば、…… 16ここにユダヤ人かかる事を安息日になすとて、イエスを責めたれば、17イエス答え給う『わが父は今にいたるまで働き給う、我もまた働くなり』18此に由りてユダヤ人いよいよイエスを殺さんと思う。それは安息日を破るのみならず、神を我が父といいて己を神と等しき者になし給いし故なり。」（ヨハネ5・2～18）

だから、モーセの律法は一応、キリストは破ってしまっているですよ、正直。安息日にも働いているんだから。「働く」と言ったって、それは職業的な働きではなくて、人を救うことがキリストにとっては働きなんです。私たちもこうやって安息日でキリストの言に救われているんだからね。この日曜日はキリストの言、御霊に救われて、御霊の力を得るためにやって来ているんだから。キリストはベテスダの池で38年間も病いの人を、全身を健やかにした。

●私は本ものから来た本もの

24外貌によりて審くな、正しき審判にて審け』

もう文句ないです、本当にね。

「審くなら審いてみろ、どこが悪いんだ」

というわけです。

25 **爰**にエルサレムの或る人々いう『**これは人々の殺さんとする者ならずや。**
26 **視よ、公然に語るに之に対して何をも言う者なし、司たちは此の人のキリストたるを真に認めしならんか。**
「認めたのなら、なるほど殺さないだろう、そうかも知れない」
なんてなわけだ。そうすると、みんながキリストと思うが、とんでもない、本当はそうじゃない。
27 **然れど我らは此の人の何処よりかを知る、キリストの来る時には、その何処よりかを知る者なし**』
「キリスト、本当のメシヤはどこから来るかはわからないんだ、そういう預言者なんだと。ところが、キリストはナゼレからやって来た。もう兄弟も知っているし」
と。そういう意味で「知る」と言っている。肉のイエスを知っているということです。
28 **爰にイエス宮にて教えつつ呼わりて言い給う『なんじら我を知り、亦わが何処よりかを知る。**
「私を知って、私がどこから来たかを知る」というのは、ヨハネ伝6章42節に出ている。
42 **咤きて言う『これはヨセフの子イエスならずや、我等はその父母を知る、何ぞ今「われは天より降れり」と言うか』**（ヨハネ6・42）
「キリストは天から降ったとは何を言っているか、寝ぼけては困る。マリヤとヨセフの子で、兄弟も知っている」
と。これが彼らのイエスの知り方なんだ。完全に躓いているわけです。ところが、キリストははっきり言っているんだ、「天から来た」と。
されど我は己より来るにあらず、真の者ありて我を遣し給えり。
この「真の者」とは「アレティノス」という。真実在者です。今度はキリストは、神とも父とも言わない。
「お前たちは嘘っぱちを言うから。私は本当の者から来たんだぞ」
と、そういう言い方なんです。ここのところは非常におもしろいです、この「真の者」という言い方は。こんな言い方をしているところは外にない。
「私は本ものから出てきた本ものだぞ。本ものに遣わされた本ものだぞ」
と。真実在者、難しく言えば、真実存者ということです。
「在りて在らしめる者から来たんだ。私は在らしめられている者だ」
と、キリストは言うわけです。神さまに在らしめられている。我々はキリストに在らしめられている。それが本当のクリスチャンです。自分でキリストを信じているなんて、そんなのではない。主観的な信仰なんて何もならない。
「本当に在らしめられて動いているか」
と。だから、嘘っぱちとも言わないけれども、観念クリスチャン、観念キリスト教が多い

わけだよ。私も長いことそうだった。ところが、御霊が来たら――今までが観念だったと――ベールが取れてしまった。

「**真(まこと)の者ありて我を遣し給えり**」

は大事な言葉ですよ。ラインを引いておきなさい。この「アレティノス」からやって来たんだと。

汝らは彼を知らず、29 我は彼を知る。我は彼より出で、彼は我を遣し給いしに因りてなり』

28節、29節は非常に力強い言葉です。こういうところを読んで、グーッとその現実に入らなければダメですよ。

●次元の相違

この八月は、完全に集会は休みますけれども、皆さんは自分の家でじっくり聖書を読んでください。そういうことも大事です。他の集会なんかに行く必要はないよ。じっくり読んで、たとえば八月中にヨハネ伝を全部読むとか、とにかく、何かそういうことをやってください。そうしたら、ある自信が出来てくる。外側のことを知るためには、それは一応、註解書は持っていて結構ですけれども、註解書からは本当の光は来ないから、それをひとつの媒介として、本当の世界に入らなくては。

いわゆる学者やエリートコースの多い無教会というのは、ギリシア語だヘブライ語だドイツ語だ英語だなんていう参考書を読んで、そしてより詳しく、これはこうだああだと詮索して、いわゆる聖書の研究をやっている。悪くはないけれども、本当はご苦労さんなはなしなんだ。それで出た結論は大したことない。私はそういう一流の学者のものを読んだって、力がこないものね。学問的な成果を私はただけなすのではないけれども、そんなことではないということです。

私だって学問的にやろうとすれば負けはしませんよ。けれども、そんなことをやるのも時間がもったいない。まぁ若い人は一応、ヘブライ語やギリシア語くらい勉強してください。語学は20代に、遅くても35歳までにやっておかないと大変だ。

30 **爰(ここ)に人々イエスを捕えんと謀(はか)りたれど、彼の時いまだ到らぬ故に手出する者なかりき。**

キリストの行動には権威があるものだから、手が出せないんですよ。「わが時機」という「彼の時」です。

31 **斯(かく)て群衆のうち多くの人々イエスを信じて『キリスト来るとも、此の人の行いしより多く徴を行わんや』と言う。**

「キリストが来ても、これ以上なことができるだろうか。全く不思議な男だ、このイエスという人は」

というわけです。それでもなおキリストとは思わない。メシヤとは思わない。おもしろいね、こういうドラマは。

32**イエスにつきて群衆のかく囁（ささや）くことパリサイ人の耳に入りたれば、祭司長・パリサイ人ら彼を捕えんとて下役どもを遣ししに、**

みんな悪いんだよな。よくテレビで時代劇をやっているでしょ。あれと同じことだ。

33**イエス言い給う『我なお暫（しばら）く汝らと偕に居り、而してのち我を遣し給いし者の御許（みもと）に往く。**

そんなことを言ったって、何のことだかわからない。

「まだしばらくいるけれども、やがて御許に行くぞ」

と。

34**汝ら我を尋ねん、されど逢（あ）わざるべし、**

天界に行ってしまうんだから、逢いっこない。

汝等わが居る処に往くこと能わず』

「お前たちは私が行く天国には行けないぞ」

と。どこへ行くかなんて、また騒いでいる。

「ギリシアにでも行ってしまのかな」

なんて。

35**爰にユダヤ人ら互に言う『この人われらの逢い得ぬいずこに往かんとするか、ギリシヤ人のうちに散りおる者に往きてギリシヤ人を教えんとするか。**

まぁ次元の相違がよくわかるでしょ。

「行くことができないと言うのは、だいぶ遠方に行くらしいな」

と。

36**その言に「なんじら我を尋ねん、然れど逢わざるべし、汝ら我がおる処に往くこと能わず」と云えるは何ぞや』**

と。わからない。

●決定的な時は聖霊のバプテスマ

今日の中で大事なのは、「時機（とき）」ということと、「本もの」という、この二つのことです。「わが時」。私は「峠」という言葉をよく使う。この「峠」が正にこの「時機」「カイロス」なんです。皆さんにも人生でいろいろなカイロス、峠がある。非常に決定的な峠は、決定的なカイロスは聖霊を受ける時です。

「もう私ははっきり、御霊のバプテスマを受けました」

と。それが本当のカイロスを、大事な決定的な時を迎えたことになる。集会で全身がしびれてしまって、そして御霊にうたれて、あとは何だかまるで世の中が変わったようになる。

それが聖霊のバプテスマです。そしたらもう、その魂で、その御霊の光でグングン聖書を読みなさい。まるで今までと違ってくるから。その恩寵をただ回顧しているだけではダメですよ。グーッと来たらば、うんと奥の世界に入らなくては。聖書の身読、からだで読む。また、この音信を人に伝えざるを得ないと。それが本当の告白なんです。

「わが時機」という。皆さんも「わが時」を――その「時」にはいろいろな時があります。ただ一回だけではない。ただ決定的な時は聖霊のバプテスマです。これははっきり言っておきます。これが来なければ、本ものになれない。嘘ものとは言わないけれどもね。だから、レッテル・クリスチャンが多くてしょうがないのは、聖霊のバプテスマを受けないからです。聖霊のバプテスマはその人その人によって、神さまが、キリストがバーッと来るその時があるから、その時を待っていなさい。待っていると言ったって、ただ待っているのではないですよ。求めている。

「求めよ、さらば与えられん」

という。それは一人でもって徹底的に祈りこむ。

祈りこむと言ったって、聖書を読みながらでなければダメですよ。聖書を読むと、その現実に入っていく。それが聖書の身読ということ。聖書というドラマの現実の中に読みながら入りながら、そういうところに祈りの心が出てくる。そうしたら、ある時俄然、グーッと上から来る。何も集会でなくたって、聖霊のバプテスマは直接上から来ますから。いいですか。

●わが時は汝の時

「わが時」というのは本当は、「汝の時」なんです。あなたのくださるその時が「わが時」なんです。自分で主観的に言っているのではない。

「汝の御意を成させたまえ」

でしょうが。汝が切りかかってくるその時を、こちらが求めているときに、あるときにグーッと上からくる。「汝の時」が迫って、これが「わが時」となるわけです。

「汝と我とは一つ」

の関係ですから。一つになってしまう。それが「わが時」の本当の意味です。

私もいよいよギリギリのところに来てしまって、黙示録をとうとうやることになった。黙示録を今年やるということはもう、この「わが時」なんだ。だから、私は来年から詩の世界に入る。来年から私は詩人ですからね。けれども、なかなか発表しない詩人だ。歌わざる詩人。

藤井先生は本当に詩人でした。今度の『エン・クリスト』の独和対照の詩に「初めの愛」というのを書いた。その中の「詩人」というのは藤井先生のことです。

「初めの愛」［独和対照］（ソネット、一九八四・六・二三）　天韻

「元始の愛は主と神から来ていた
幼いときに、だがそれは知らなかった。
第二の愛は母から流れて来た。
彼女は私を愛と光で育ててくれた。
第三の愛を兄に感じた。
少年のときに彼から学んだ際に。
第四の愛は詩人から来た、
彼は日曜に深く聖書を説いた。
最後の愛が天降りした。
阿蘇山で祈っていたときに、
聖霊が私の中に突入した。
キリストの初めの愛はいつも
私の霊と体に力を賜うた、
私はその愛の中に絶えず帰入する。」（『エン・クリスト第19号、１９８４年７月）

という詩です。これはみな愛です。キリストの初めの愛と最後の愛です。

あなた方もそういうようないろんな時がある。一切の愛は神さまから来ます。それが恋愛であろうと何であろうとみんな神からやってくる。そういうような大乗的な把握の仕方が普通できないんだよな。ゲーテはそれをやってました。ゲーテがなぜ偉大かというと、「神・自然・我」が一如の世界に入っているからです。

「わが時」は実は「汝の時」。汝に示される時がわが時なんです。それで来年から始めようというわけです。これは、ある時間はどうしてもかかりますが、完成の時に向かって進んでいく。けれども、地上はドラマですからね、いつそれが完成するかわからん。私は三日月で終わるかもしれない。いつでも終わっていいよ。ただし、この三日月は満月と同じ性質を持った三日月である。未完成交響楽である。そういう気魄でもって、皆さん、仕事をしてくださいよ。そうしたら、あなた方は、することなすことに本当に楽しくてしょうがないし、力がくる。

●十字架にかかる時

キリストの「わが時」はもちろん十字架にかかる時でした。

「わが時いまだ至らず」

と。贖罪の大業をなす時です、このキリストの「わが時」は。それから続いてくるのはもちろん復活であり、昇天であり、聖霊の降臨である。まぁ大変なひとですよ、イエスというひとは。このメシヤにユダヤ人はみんな躓いてしまった。今でも躓いている。躓きの最たる者はパウロであったが、そのパウロがひっくり返された。パウロを見て、これがひっ

くり返されて、

「俺たちの躓きはまだパウロのよりか大したことなかった」

と言ってひっくり返ってくればいいんだけれどもさ。「頑（かたく）なる民」と申命記に書いてあるけれども、全くユダヤ人は頑ななる民だよな。けれども、

「ユダヤ人が最後に悔い改めたら、世の終りがくる」

と、パウロが神の歴史哲学をちゃんと言っている。

もう皆さん、烈々たる魂になってくださいよ。キリストの火が本当に燃えていれば、いかなるものもこれを消すことができない。それでなければ、福音だなんて言えないんだよな。

そういうような決定的な「わが時」です。御霊を受けて――もちろん、その土台は十字架です。過去・現在・未来、全我というものを、私の全てを完全に贖いとっているのが十字架です。その他に言いようがない――皆さん一人びとり、そこにはもういかなる問題もない。魂の問題は全部すっ飛んでいる。地上ではどんな問題があったって、そんなことはいいんだ。完全にもう天界の人にされる。その場が十字架で、その天界的な、天的な実存はこの聖霊です。

それが「アレティノス」「真（まこと）なる者」です。神さまという「真なる者」が私をつかまえた。私は何ものでもない。教えることもできない。何もできないと。ところが、キリストはこの「真なる者」「本もの」に自分を全託して、神さまの中に自分を入れたら、このキリストが今度は「本もの」である。無即無限無量の本ものです。空なるものが本当の実なんです。そうでなければ、

「すべてが空の空なるかな、すべて空なり」

と、伝道の書にある。

あなた方、これを読んでいてビリビリ来なかったら、うそですよ。そういう読み方をしなかったら。呑気な顔して読んでいたのでは。

「なるほど聖書は生きものだった。文字ではなかった」

とナポレオンが言ったでしょ。そういう喜びの中に入って、もう叫ぶような祈りに時々なりなさい。まぁどこを読んでも、聖書というのは凄いよな。今日はそこでお終い。